

教育長室だより

第 20 号

2020.6.25

京都大学総長の山際寿一という人は霊長類学・人類学者で、ゴリラ研究の第一人者です。アフリカのジャングルでゴリラの群れとともに長く過ごした経験のある人です。山際さんはゴリラの研究を下敷きに人間のコミュニケーションや文化について多くのことに気づき、本を書いています。

今回はこの山際さんの意見を参考に、今子どもたちにも身につけることが重要だと言われるコミュニケーション力について考えてみたいと思います。

○

今、若者や子どもたちは（もっと上の人も）SNSと呼ばれる、インターネットを利用したコミュニケーションのネットワークに、思った以上にどっぷりとつかっています。フェイスブックやツイッター、インスタグラム、そしてラインなどたくさんのネットワークが利用されています。自分の体験や主張を写真や動画も含めて発信でき、世界の誰かわからない人から「いいね」と支持されるのを待って、人とつながった感覚を持つことができるというものです。

最近、若い女子プロレスラーが、このSNSでの中傷に耐えられずに自殺するという事件があり、誰かを特定されないまま自由に発信できることの問題点がまた大きく取り上げられることとなっています。

○

先の山際さんは、ゴリラのコミュニケーションの様子を観察し調査する中で、人のコミュニケーションのあり方の特性を見つけ出しています。

その中でわたしが注目するのは、「生の話し言葉」と「文字で書かれた言葉」には決定的な違いがあるという点です。

○

話し言葉と書かれた言葉の違いというのはずっと言われてきたことで、わたしたちもだいたい理解していると思っていました。けれども先に書いたSNSを介した悲劇などを聞くにつけ、今のような個人がものすごくたくさんの人に向かって瞬時に発信できる状況ではさらに大きな違いが生まれ、そのことをわたしたちは理解していなければならないのではないかと思うわけです。

○

一時（今もでしょうか）既読スルーという言葉がよく聞かれました。SNSで発信し

たことに対し返信などの反応がないことで、これに対してひどく腹を立てて関係が壊れることがあるのだそうです。これを恐れて、常に届いたコメントに反応しなくてはならないと、スマホを片手に神経質になるということもあるようです。

○

山際さんによるとゴリラも豊かにコミュニケーションをとっているようです。しかし、ゴリラの世界には「誤解」というのがないということです。ゴリラはもちろん言葉を持たないので、表情やしぐさや声で意思表示し、それを間違っって受け取ることがないのだそうです。

○

わたしたち人間も同じ場所において直接話をするときは、同じ言葉でも「言い方」や言うときの表情や声、また、身ぶり手ぶりなども含めて言いたいことを伝えます。その場合には話した言葉の中身以上の様々なことが相手に伝わります。誤解を生むことは少なくなるわけです。

SNSもお互い瞬時に反応ができてまるで話しているように感じることができます。だから、これが会話の代わりになると思われるのもわかります。

○

しかし、文字と生の言葉とは全く違うということです。友達とやりとりしていても時には誤解を生じることがあります。特に面識のない人からの短い「書かれた言葉」はその言葉の意味しか伝わらないので、ひどく傷ついたり不安になったりするのは当然です。。

○

子どもたちを育てていく中で「人とコミュニケーションがとれる」能力がこれからの時代大切であるということをこれまでも書いてきました。

そのためには本を読んで言葉の力をつけることがまず大事だと言い続けてきました。しかし、もう一つ大事なことを付け加えなければならないと、山際さんの意見を読んで思います。

人とコミュニケーションをとるには「共感」と「関心」が必要だという言葉にはとても納得させられます。その人に共感しながら、その人に感心を持ちながら話すことではじめてその人を理解しコミュニケーションがとれるということです。

○

子どもたちがどのようにしてこのようなコミュニケーション力を身につけられるか。まずは人と接する機会を持つことから始めなくてはならないのでしょうか。多くの人と関わる経験、それもまず自分を受け入れてくれる人とたくさん関わること…。これが基盤になっていくのでしょうか。